



年 組 名前

道新ワークシート

もみ殻を燃料、土壌改良材に

新十津川 村田農産 来月から製造



もみ殻を利用した燃料などをつくる新築の工場を前に、意欲を語る村田代表

【新十津川】町内で米などを生産する村田農産は、廃棄されることの多い米のもみ殻を活用し、バーベキューなどのアウトドアやまきストーブ向けの燃料と、土壌改良材を製造する。昨

年末に工場を町内に設けた。今年2月から順次製造を始める。まずは同農産の米のもみ殻を使うが、将来的には町内の他の農家からもみ殻を集めて製造するという。

村田農産では、米や小麦、ニンニクなどを32畝で栽培。そのうち米は18畝。もみ殻は年間18トほど生じている。同農産では畑にすき込んで処理している。

道によると、2021年産の米のもみ殻の発生量は約15万2千ト。畜舎で牛などの敷料に使われるのが最も多く31%だが、廃棄は27%を占める。道農産振興課は村田農産の取り組みについて、「もみ殻を商品化する例は珍しい」という。

工場は鉄筋コンクリート造平屋約200平方メートル。事業費は6200万円で、半分は経済産業省の「事業再構築補助金」を充てた。建物は昨年末に完成しており、1月中旬に建物の中に機械を設置する。

燃料はもみ殻をすりつぶし、高温で10分の1に圧縮する。出来上がる燃料は直

径約5センチ、長さ20センチの円筒形で、バーベキューやまきストーブなどの活用を想定する。2月中旬にも製造を始める。

熱量はまきと同等かそれ以上で、燃焼時間はまきの約3倍。さらに湿気に強い特徴があるという。町内のアウトドアショップで販売を始め、その後今夏までに大手コンビニエンスストアの道北方面の店舗で販売する計画だ。

土壌改良材はもみ殻を加熱し炭にする。改良材を土に混ぜることで、土の通気性や排水性などの向上につながるという。町内での販売を計画しており、3月ごろに製造を開始する予定。

いずれも価格は販売先と協議して決める。こうした商品の製造で農閑期に新たな仕事が生まれ、繁忙期にしか雇用していないパート従業員を通年で雇用できる利点もあるという。村田農産の村田和也代表(45)は「地域の活性化にもつながりたい」と話す。

(望月悠希)

2024年1月16日(火) 朝刊 空知版 15ページ (記事は再編集しています)

- ① 新十津川町で米などを生産する村田農産は、米のもみ殻をどのように活用しようとしているか、記事の中から読み取って書きましょう。
- ② こうした商品の製造でどのような利点が生まれるのか、記事の中から読み取って書きましょう。